

デイヴィッド・ナッシュ・レクチャー

3年前、ルドルフ・シュタイナーの作品に出会いました。そして私自身の仕事と近いものをそこに感じました。たぶんこう言っても間違いではないと思いますが、この世界には人智学と近いところにいる多くの人たちがいると思います。しかし彼らはそれに気付いていません。シュタイナーを知ってはいません。しかし実際、彼らの活動、生き方、考え方は人智学のそれと非常に近いのです。従ってグループが開かれていることが大切になります。人智学の人たちはグループをつくっていて、一方にはグループに入っていない人たちや、人智学を知らない人たちがいます。これはあなた方を枯死させてしまう重要な問題です。

では、事の起こりから話していきたいと思います。

ウェールズのある地域に学校教育のことを心配しているたくさんの親たちがいました。そしてその中の3、4人が、私自身もその中の1人ですが、オルタナティブスクールに注目したのです。けれども学校に対する考えはそれぞれ異なっていたので、どういう学校を必要としているのか、私たちは数多くの討論をし、それから別の学校を、別の教育方法を調べていったのです。そしてシュタイナー学校を発見しました。

まず最初に、シュタイナーの団体から人を招き、シュタイナー学校について話をしてもらいました。地域には宣伝しておきましたので、たぶん15人くらいの人が集まると思っていたのですが、驚いたことに100人以上の人たちがやってきたのです。しかも、そこに集まった人たちはその時まで顔を合わせたことなどなかったのです。

シュタイナーの団体から来た人が話をし、その後で集まった人たち同士が話し合いを始めました。人々が集まった理由は、人智学に興味があったからではなく、学校を必要としていたからなのです。私たちは人智学が何であるか知らなかったのです。ただ子供たちのことが心配だったのです。

それから約2週間後、興味のある人たちが集まり、また会合を開きました。そこに非常に年を取ったおばあさんがやってきたのです。とても強烈な個性を持った人でした。彼女は人智学を熱心に65年間も勉強していました。そして彼女は「もし人智学に興味があるのなら、お教えしましょう」と申し出てくれました。「もし」と彼女が言ったのは、人智学を勉強している方にはお分かりでしょうが、人智学は人々に強要してはいけないものだからなのです。請われるまで待っていなければいけないのです。とにかく、彼女がそう申し出てくれたので、私たちの中の10人くらいが彼女の家へ行き、勉強会が始まりました。私たちはシュタイナー学校を必要としていたのですが、その学校の背景についてまだまったく知らなかったからです。

先ほど10人と言いましたが、最初はたぶん15人くらいです。それでその次が10人、それから8人、結局3人になってしまいました。けれども私たちは続けてゆきました。私たちにはとても面白かったし、何人かが実際に人智学を勉強する必要があると理解していたからです。必ずしも親たち全員が勉強する必要はないと思います。たとえば輪廻転生とか、人

智学をクレイジーだと言う人もいます。

1年後に5人になり現在また増えていますが、この小さなグループに加えて学校を必要としている人たちの大きなグループがあります。人々はいつも150キロ離れた場所に設立されたシュタイナー学校を見学に行っていました。みんなその学校とそこで行われていることが気に入りました。

最初にしたことは、学校をつくることができる状況をつくることでした。私たちは金を持っていなかったなので、その地域の地元のお祭りの時に出店を出して食べ物を売りました。それは少しの金にしかありませんでしたが、一緒に働いたという点で重要でした。

私にはとても興味深かったのですが、グループのほとんどの人たちがここ10年の間にこの地域に移ってきた人たちだったのです。彼らは非常に独立性を持ち、自立性に富んだ人たちでした。たとえば私は芸術家だし、陶芸家などそれぞれが違った職業に就いていて、そして一度もグループに属したことがない人たちでした。そうした非常に個別的な人たちが初めてグループをつくったのです。

そこに（お祭りに）私たちが訪れていたシュタイナー学校から先生が2人、生徒を連れてやってきました。その先生は私たちのグループを気に入ってくれ、もし必要だったら自分たちが先生になってもいいと申し出てくれたのです。彼らは夫婦で、2人とも60歳近くでした。40年間の教師経験がありました。彼らは新しいタイプのシュタイナー学校をつくることのできる状況を捜していました。私たちの時代に適した、私たちにとって意味のあるシュタイナー学校をつくりたいと思っていたのです。シュタイナーは、人智学は進化発展していかなければならない、新しい形態、新しい方法が表れてこなければならぬと絶えず言っています。ところがドイツにおいては、いまだに最初のシュタイナー学校が模倣されています。たとえば13歳から15歳の子供たちは一日中、教室の外に置かれます。彼らは一日中、おそらく1時間も教室の中に入ることができないのです。戸外で実際的なことをするわけです。それで16歳になったら学校に戻って、より知的な学習をするのです。私たちはこれを他の学校と同じようにしたいと思っています。子供たち、そして親たちが学校を必要としていた、学校に対して社会的なニーズがあったのです。

次に学校の場所を捜さなければならませんでした。私たちは田舎に住んでいます。大体40キロの範囲に住んでいるのですが、その地域の中心に校舎を必要としました。

1年間信じられないくらい議論しました。ある人が一つの場所を見つけたのですが、そこは他の人にとっては遠すぎました。これでは申し分のない場所だとは言えないでしょう。

私たちは投票では決めませんでした。全員が賛成するまで物事を終わりにするべきではないと思うのです。それで私たちは遅くまで、午前2時くらいまでミーティングを続けました。このことは家庭に多くの負担をかけました。それぞれの家で妻か夫が遅くまで外出しているのですから、問題も起きました。これらはとても人間的な問題です。

一方、グループの方はより強く、より堅固になりました。人々は嫌いな人たちを愛することを学びました。そして本当の討論が互いにできるようになりました。しかしグループには

まだ不安がありました。その不安は、その地域のまったくの中心にこの建物が見つかったことによって解消されました。この建物が有力な候補になりました。

まずグループがありました。そして子供たちがいます。いまやすべてが可能になりました。何よりも重要だったのは経験を積んだシュタイナー学校の先生がいたことです。そして建物が見つかりました。

次は資金が必要です。資金づくりを始めました。建物を買うのに 3500 万円を必要としました。とても安いのですが、小さなグループにとっては多額です。グループの全員ができるかぎり出資し、寄付金として 1100 万円が集まりました。その他グループのメンバーから 1100 万円借りました。それから人智学の銀行があり、学校その他のプロジェクトを援助していますので、私たちはそこに援助を求めました。

そこでは次のようなことが試みられています。預金する人々はその金がどこで使われているのか知りません。普通の銀行にお金を預けると 10%の利子が付きます。けれども、銀行がその金を何に使っているのか知ることはできません。核兵器が造られているかもしれません。化学薬品を造ることもできます。ところがこの人智学の銀行では、金を貸す人がプロジェクトに関わっていくという、優れたアイディアを実行しています。金がよいことに使われていることを望んでいて、よいことに使われるのならば利率が低くても構わないという人たちがいるのです。銀行は、低利で私たちに学校の設立資金を貸してくれる人たちを捜してくれました。金を貸与してくれる人たちがプロジェクトに興味を持てば持つほど、低利になりました。

原理となるのは金が精神的な力を持つということです。金が邪悪なことに使用されると、力も邪悪になります。預金している人たちはみな、生活に必要な以上の金を持っているのですが、そういった人たちがその金でなされていることに責任を負うことが大切です。あなた方は銀行に預金します。しかしそれが何を引き起こしているのか知りません。原則となるのは、人々を励まし、彼らの所有している金に対しより責任を持たせることです。

個人的には5年のうちに借金をすべて返済したいと思っています。自己資金だけにしたいのです。こうして私たちは資金を手に入れることができました。しかしその 60%は借金で、私たちはそれを返済しなければなりません。

学校のことでもう一つ考慮しなくてはならないことがあります。それは寄付金に頼らなくてはならないということです。学校は金を生み出す工場ではありません。子供たちの授業料は親が支払います。日本にも私立の学校がありますが、それぞれの子供につき同じ額を支払う、2人、3人、あるいは4人の子供の授業料を支払うとすると、非常に多額の金が必要になります。多くの子供を持った親が、この種の学校に彼らを通わせることは不可能です。そこで、新しいイギリスのシュタイナー学校では別の方法がとられます。第一の原則は子供当たりではなく、家族当たりで授業料を支払うことです。子供が1人の家庭と3人の家庭があったとします。その場合、後者はほんの少しだけ多く、10%くらい多く支払えばいいので

す。こうしてよりたくさんの子供たちが学校に来ることができます。シュタイナー学校は、たくさんの子供たち、様々な家庭環境の子供たち、金持ちの家庭、貧乏な家庭の子供たちを必要としています。子供当たりではなく家庭当たりというのが、第一の原則です。

第二の原則は、両親はできるかぎりの援助を、学校に対してできるかぎり金銭的援助を行うということです。可能ならば収入の約 12%を支払ってもらいたいと思います。収入の多い人は、乏しい人に比べて極めて多額の金を支払うこととなります。けれども実際の比率に照らし合わせると同額を支払っているのです。支払金額は同じではないのですが、収入に対する割合は同じだというわけです。

国家による教育を「職業」と「天職」という点で考えてみましょう。30年前、教師は自分の仕事を天職と見なしていました。看護婦と同じように、社会との関連を常に意識していました。それは奉仕であり、面倒を見ることでした。しかし今では、彼らはそれを「職業」と考えています。彼らは面倒を見るということをしません。子供たちの生活に関与しません。ただ試験にパスする方法を教えるだけです。シュタイナー学校の教師は必要以上のものを学校から受け取りません。このことが学校を助けています。教師には給料を支払わなければなりません。けれども彼らは必要なだけを受け取り、決して多くを受け取ることはありません。というのは、シュタイナー学校の教師は学校にとっても深く関与しているからです。彼らこそ本当の教師です。私の言う職業的な教師とは、勤務時間のみをきっちりと守る教師のことです。シュタイナー学校の教師は、その意味で職業的な教師ではありません。

Q:先ほど輪廻ということが出ましたが、シュタイナーを読むのは大変だったのではありませんか。

A:最初はとても大変でした。あまりにもヘヴィーなので驚いたくらいです。しかしとても印象深かったのは、シュタイナーは読者に信じることを求めないで、概念自体を読者の前に立ち現せることを求めたということです。もしこれが福音主義者のように信じることを強要していたならば、私はとっくに逃げ出していたでしょう。シュタイナーの作品を読んで感心したのは、講演の中でイメージを自身の前に浮かび上がらせなさいと毎回言っていたことです。私は読書をしました。その時、分かってはいたが言葉にできなかった事柄を認識するという体験をしました。私は作品を制作しながら、自分をとても孤独に感じていました。けれどもシュタイナーを読んだ時から、私はもはや孤独ではないと思うようになりました。

しかしまた、そこにかなりキチガイじみたドグマがあることにも気が付いています。たとえばある学校では、そこはとても美しい石の建物なのですが、ぞっとすることにそれがすべてがピンク色に塗られているのです。どうしてかというと、シュタイナーが幼い子供にはピンク色がよろしいと言ったからだということです。もう一つ例を挙げますと、彫刻には穴が開いてはいけぬ。だから、人智学の人たちの中にはヘンリー・ムーアの作品が嫌いな人がたくさんいます。

どんな思想の場合にもそうなのですが、人々はいつも専門家になりがちです。自分を権威

者だと思ってしまうのです。彼らはシュタイナーの全作品を読んで、自分たちを権威者だと、専門家だと考えるのです。そうしたとき、彼らの想像力はとても窮屈なものになってしまいます。人智学が法律になり、グループは分裂してしまうのです。

この部屋を例にとって話してみましよう。私はこの部屋をここから体験しているのでしょうか。そしてあなた方は、そちら側からこの部屋を体験しているのでしょうか。私たちはまったく別々に体験しているのでしょうか。いいえ、私たちは個人的にではなくて、グループの中で、グループとして全体の体験をしているのです。グループとしてこの部屋を全体的に体験しているのです。個人としての体験は、どんなこともその一部分に過ぎないと思います。ある問題によってグループが分裂しかけている、それは「落ちている」ということだと思います。グループにとって最善のことは、問題があることです。あなた方は上っていかなければなりません。英語に「fall in love」という表現がありますが、「rise in love」でなくてはならないと思います。それはまた「温かみ」へ入ることでもあります。

Q：あなたの彫刻とシュタイナー教育との関係について話してください。

A：私は常に芸術を何かを言い表すための手段だと考えています。それがただ単に美しいオブジェであるだけなら、芸術は何の役にも立ちません。それだけでは何も言い表さないし、何かを表現しているとは言えません。

私の作品は数学・生物学・地理学・物理学・化学に関係しています。芸術家、彫刻家として仕事をしているとき、私は常に様々な局面に関与しています。シュタイナー学校のことでとても嬉しかったことは、絵をかくこと、体を動かすこと、そして音楽が全教科で使われていることです。化学の授業で絵をかきます。化学変化の絵をかくわけです。子供たちは何が起きているのかを体験するのです。ここでは良い絵をかくことが問題ではないのです。私の作品において私が意図しているのは、きれいなものを作るのではなくて、まず第一にそこにあるものをありのままに見る、概念をありのままに見るということです。芸術は教育のための一つの手段です。芸術のために芸術を学ぶものではありません。

そしてまた、鉱物界・植物界・動物界・人間界について読んだ時、私はそこで言われていたことを樹木で作品を作ることを通して経験していました。私は樹木が大地から生まれてくることを知っていました。シュタイナーは大地と鉱物界について語り、鉱物が植物の生命に入り込んでゆくと述べています。それはまさに私が感じていたことなのですが、言葉や形にすることができなかつたものなのです。

またとても勇気づけられたのは、人間は相互に依存し合い、そして進化発展していくということです。そしてこの発展は、物質身体においてではなく、意識において起こるのです。意識が発展していくのです。この発展はまだ始まったばかりであり、今後多くの発展段階を経ていかなければいけません。

人間は生存するために自然に働き掛けなければなりません。つまり自然を変化させなければなりません。人間の大地への最も大きな働き掛けは農業です。農業によって、鉱物は植

物を通過して人間の物質身体へと変容されます。この部屋の中にあるものはすべて自然から変形されたものです。私たちの文化にとって問題なのはその変形を行い過ぎている点にあります。私は自分の作品の中で、どの程度の変形が適切かを示しています。

人間はカメラなしでもうまく発展していくことができます。写真を撮ることによって、あなた方はその瞬間を延長しているのです。写真に撮っておいて後で見るのです。美しい場所に行き、写真を撮ると他の場所に行ってしまう。あなたは写真を撮ることによって、場所を手に入れたと思うのです。写真を見て喜んでいるのです。しかし、あなたはその場所で冥想するわけではありません。私もカメラをよく使いますが、そのことについて意識的であろうと努めています。このことを理解していない場合、あなた方はその瞬間を所有しようと、写真を撮ることによってそれを保持しようとしているのです。

だから山岳地帯などの美しい場所に行ったときは、その体験を自分自身に浸透させなければいけません。その場所を本当に見て聞き取らなければなりません。しかし、あなた方はそんな時間などないと言うかもしれません。他の場所に行きたいと言うかもしれません。でも一つの場所にとどまって、その体験を本当に自分自身に浸透させることが必要なのです。

(翻訳／磯貝一、守谷訓光)